

命名の言語間対照を目的とする概念の体系

大 島 中 正

【キーワード】 単語の名づけの意味, 命名単位, 命名者の発想法, 概念の体系, 対照語彙論

1. はじめに

玉村文郎(編)『新しい日本語研究を学ぶ人のために』(1998年, 世界思想社)の「序論」では, 対照言語学の流れについての概観がなされ, 今後の重要課題が次のように述べられている。

さて, 対照言語学は外国語教育を土壌として成長してきたことから, 教育のための手段と見られがちであるが, それ自身, 言語学の独立した1部門である。部分的・断片的であった研究や方法論の確かでない研究を反省しつつ体系化・科学化を図ることが, 今求められている。1言語を科学的に分析し記述することさえ容易でない課題であるから, それを他言語との対照において完成することは, なおさら容易なことではない。しかし部分部分の積み重ねは, 途は速くとも可能ではなくである。個々の言語と日本語の対照を, 一貫した分析手続きによって, なるべく全面的なものにすることを目指さなければならない。(同書七頁, 傍線は本稿筆者が施した。)

語彙の分野に限っても, 一貫性のある分析手続きによって全体を指向する記述が求められなければならない。本稿は, 命名行為およびその結果である命名単位(naming unit)についての言語間対照を行うための中間項として有効な概念の体系を提示しようとするものである。

2. 命名の言語間対照

まず最初に, 「命名の言語間対照」の研究対象について述べておこう。「対照語彙

論」あるいは「語彙の言語間対照」と言わずに、「命名の言語間対照」と言うのは、「対照語彙論」の一領域として「命名の言語間対照」を位置づけることができると考えるからである。対照語彙論の主要な対象となる言語単位は、語彙の要素である単語であるが、単語には、高橋太郎（1996）にも述べられているように、名づける意味をもつ、名詞・動詞・形容詞・副詞（陳述副詞を除く）と、陳述副詞・接続詞・感動詞などのように、名づける意味をもたないものがある。命名とは、命名者が、現実の世界または観念の世界において認識した「多くの事物や事象の中から、個々の事物・事象だけに属する臨時的な性質とか偶然の特殊性とか個性性とかを捨てて、共通内容を抽象して得られる一般表象」¹⁾である「概念」に対し「単語」または「語結合」を与える行為である。したがって、命名の言語間対照では、名づける意味をもつ単語、すなわち名詞・動詞・形容詞・陳述副詞を除く副詞および、それらから構成される語結合を対象とすることになる。なお、従来、命名論においては、三宅鴻（1976）の言う指示（denote）する単語、すなわち人名・地名・作品名・商品名などが主な対象とされてきたが、命名の言語間対照では、それらばかりでなく、同じく三宅鴻（1976）の言う表示（signify）する単語である共通名詞や動詞・形容詞・陳述副詞を除く副詞をも対象とする。また、林四郎（1982）において感動詞・接続詞・陳述副詞・助詞・助動詞とともに「辞」とされた、「コソアドの代名詞」・「コソアドの連体詞」（両者は、ともに「実辞」に分類されている）および「コソアドの副詞」（感動詞・接続詞・陳述副詞とともに「虚辞」に分類されている）は、名づける意味をもたない単語と考え、対象外とする。

次に、命名の言語間対照の課題についての私見を述べよう。命名の言語間対照は、複数の言語間において、概念と、概念に与えられた「名」である「命名単位」との関係がどのように相違または類似するのかを記述すること、さらには、同類の概念に対応する個々の命名単位から推測できる、命名者の発想法²⁾についてその類似点と相違点をとらえること、たとえば、日本語の「天の川」と英語の“Milky Way”とでは命名の際の、命名者の発想法がどのように違っているのかということを記述することが主要な課題であると考えられる。

3. 概念の体系

本稿で提示する、概念の体系は、対照語彙論の一領域である、命名の言語間対照のためのものであるが、国立国語研究所の『分類語彙表』（林大担当）とは違い、品詞論的分類は行わない。なぜならば、同類の概念に対応する命名単位であっても、言語によって、その命名単位が単語であったり、語結合であったり（たとえば英語の“thirsty”・中国語の〈渴〉と日本語の「のどがかわいている」など）することや、単語であってもその品詞が異なること（たとえば中国語の形容詞〈斜〉と日本語の「斜めである、傾いている」など）があるからである。同一の言語の内部でも、村木新次郎（1996）も指摘するように、同類の概念に対応する単語の品詞が異なること（たとえば、動詞「痛む」の「昨夕は奥歯がひどく痛んだ」と形容詞「痛い」の「昨夕は奥歯がひどく痛かった」など）もある。同類の概念に対応する命名単位が単語か語結合かということ、さらには、その単語（または語結合の構成要素である単語）がそれぞれの言語においてどのような品詞に属するのかということは、いずれも命名の言語間対照にとって興味深い問題である。

まず、わたくしが考える分類の原理について説明しよう。現実の世界であれ、観念の世界であれ、そこに生起するさまざまな事態を、言語の使い手である人間は、文によって表現し伝達している。その文に表現されている事態の側面の中で、「存在」・「性質・状態」・「運動」の主体であるものにまず着目したい。そこには、言語によって認識し思考し伝達し創造する³⁾主体である【人間】（以下、本稿では、概念の名称を【 】で囲って示すことにする）を見いだすことができる。そして、その【人間】以外のものとして、人間をとりまく自然環境と、人間が自然環境もしくは他の人間に働きかけることによって作り出したもの（組織・記号・道具・作品など）とを考えることができる。前者を【自然環境】、後者を【社会環境】と仮称することにしたい。たとえば、日本語の「いね」は【自然環境】に「こめ」・「めし」は【社会環境】にそれぞれ属する実体概念に対応するということになる。 「いね」・「こめ」・「めし」の三者に対応し得る英語の“rice”は【自然環境】【社会環境】の両方に属することになる。

【人間】・【自然環境】・【社会環境】の三者のそれぞれについて、【実体】・【部分】

側面】・【存在】・【性質・状態】・【運動】といった五種類の概念を考えてみることにすると、概念の体系の大分類は次のようになる。(以下、表記上の便宜のため、【自然環境】・【社会環境】をそれぞれ【自然】・【社会】と略記する)

A・1【人間の实体】	B・1【自然の实体】	C・1【社会の实体】
A・2【人間の部分・側面】	B・2【自然の部分・側面】	C・2【社会の部分・側面】
A・3【人間の存在】	B・3【自然の存在】	C・3【社会の存在】
A・4【人間の性質・状態】	B・4【自然の性質・状態】	C・4【社会の性質・状態】
A・5【人間の運動】	B・5【自然の運動】	C・5【社会の運動】

以下、日本語の語彙に属する個々の要素を上記の概念によってどのようにとらえることができるかを、具体例を示しつつ見ていくこととする。

【人間】(A・1～A・5)は、林四郎(1982)にならえば、【生物人】と【社会人】とに分けることができよう。【生物人】の【实体】を表す命名単位としては「人間・ヒト」といった単語をはじめ、「男・女」といった性の別や「おとな・子ども」といった成長段階に着目したものがある。「社会人」の【实体】には、「夫・妻」「敵・味方」等の種々の人間関係や身分・職業を意味する単語などがある。同じ「人間」という単語であっても、「人間の先祖は猿だ。」という場合の「人間」は【生物人】の【实体】であり、「あいつは人間ができてい。」という場合の「人間」は【社会人】の【部分・側面】(A・2)であると考えられよう。【人間の部分・側面】は【生物人】であれば、「頭・胴・手・足・目・耳・鼻・口」等の身体部位名や「汗・血」あるいは「身のこなし・フットワーク」などが考えられ、【社会人】であれば、「性格・人物・人望・気性・気持ち・思いやり・やさしさ・強さ・向上心・協調性・知識欲・洞察力・語学力・アイデンティティー」等々、人間の性格・能力などに関係する単語が考えられる。「姿勢」などは、【生物人】・【社会人】いずれの【部分・側面】としても位置づけることができよう。【存在】を表す「ある・ない」や【性質・状態】を表す「高い・低い、富む・欠ける」等と【人間の部分・側面】を表すものごとを組み合わせ、人物を評価する表現を構成することのできる場合がある。【存在】を表す単語は、【人間】・【自然】・【社会】の別を問わず、「ある・ない」に代表される比較的少数の単語に限られようが、合成名詞に見える「～付き・～入り、～抜き、～無し」等は、【存在】と考えてよいのかもしれない。【人間の性質・状態】の場合ほど

うであろうか。【生物人】であれば「痛い・かゆい」のような感覚形容詞が、【社会人】であれば「うれしい、かなしい」のような感情形容詞がそれぞれの代表的な命名単位ということになろう。命名単位が語結合であるものもある。たとえば、先にふれた、【人間の部分・側面】を表す単語と【存在】の「ある・ない」とを組み合わせたものの他に、同じく【人間の部分・側面】を表す単語と【性質・状態】を表す単語を組み合わせた「背が高い・背が低い」、「気が強い・気が弱い」や【運動】と組み合わせた「のどがかわいている」、「腹がへっている」等がある。語結合「腹がへっている」は、単語「空腹(だ)」と同類の概念に対応すると考えられる。【人間の運動】も【生物人】であれば、「寝る・起きる・妊娠(する)・出産(する)・病気(になる)・風邪(をひく)・汗をかく」等のような生理現象に関する単語や語結合が主な命名単位であると考えられる。「汗をかく」という語結合は、【生物人】の【部分・側面】に属すると考えられる「汗」を構成要素にもっている。【社会人】の【運動】には、その下位概念として、【記号の使い手としての運動】【日常生活における運動】【職業生活における運動】【余暇活動における運動】等が考えられようが、本稿ではその名称をあげるにとどめておく。

【自然】(B・1～B・5)は、【時間】と【空間】とに大きく下位区分できよう。

【時間】の【実体】としては、「とき・時間・時代」といった単語をはじめ、「春・夏・秋・冬」のような季節を表す単語や、「とし・つき・ひ・週・としつき・歳月」などの単語がある。その【部分・側面】としては、「年頭・年末」といった合成語や「年のはじめ・年の暮れ」といった語結合がある。【性質・状態】に属する単語としては「はやい・おそい」といった形容詞が代表的な単語かと思われる。【運動】についても、「たつ・すぎる、あける・くれる」といった自動詞が代表的な単語であろう。「(夜が)明ける・(日)暮れる」に対する「(夜を)明かす・(日)暮らす」は【人間】の【日常生活における運動】に属すると考えられる。【空間】は、林四郎(1982)にならえば、【天】と【地】に下位区分することができる。【天】の【実体】としては、「日・月・星・太陽・地球」のような【天体】を表す単語と「雨・雪・風・霧、朝焼け・夕焼け」のような【天象】を表す単語とに、さらに区分することができよう。一方、【地】の【実体】を表すものとしては、「海・陸・山・丘・川・森・林」のような【天然の地相】を表すものと「田・畑・道・橋・庭・ダム・スキー場」

のようないわば【人工の地相】とでも言える概念に対応するものを考えることができるが、後者は【社会の実体】に含まれるべきかもしれない。このほかに、【地】の【実体】には【地相に存在する天然の物】である【(人間以外の)動物】・【植物】・【鉱物】という下位概念を立てなければならない。【天】の【部分・側面】としては「上・下、前・後ろ、右・左、東・西・南・北」のような方向・方角を表す単語がある。「北極・南極・赤道」なども「地球」の【部分・側面】ということになるかもしれない。【地】の【部分・側面】としては「いただき・ふもと、山頂・山麓、海面・海底・海拔」等の【地相】の【部分・側面】を表す単語、および【(人間以外の)動物】や【植物】の【部分・側面】を表す「め(目/芽)・は(歯/葉)・み(身/実)・鳴き声、年輪」等のような単語がある。先にふれた【天象】に対して【地象】なる概念をたてれば、そこには「地震・津波・洪水・雪崩」等が含まれるだろうが、これらは【運動】に属するべきものかもしれない。次に、【性質・状態】にうつろう。【天】のそれとしては「暑い・寒い」のような気温に関する形容詞が代表的な単語であろうかと思われる。一方の【地】は、【社会】の【性質・状態】と同様、【人間】の【感覚】や【感情】を表すものを除く、種々の単語ならびに語結合が存在すると考えられる。【運動】はどうであろうか。【天】の【運動】としては、「(雨/雪が)降る・(風が)吹く、(雨/雪/風が)やむ」のような動詞が代表的な単語であろうが、このような天象について、その【実体】と【運動】のそれぞれに別別の命名単位を有する場合(たとえば、日本語の「雨」と「降る」や中国語の〈雨〉と〈下〉)とそうでない場合(英語の“rain”など)とがあることは、命名論的に興味深い現象である。【地】の【運動】には、人間以外の動物や植物などの運動、および海や陸で発生する種々の自然の【運動】に与えられた命名単位がふくまれる。榎垣実(1961)の262頁には英語における、鳥や獣を主体とする(日本語で言えば)「鳴く」という【運動】に対する単語のリストがあがっているが、このような言語間対照を出発点として、日本語に豊富であるとされる音象徴語のより詳細な研究がすすめられることになるであろう。動物の鳴き声を表す音象徴語は、【地】の【性質・状態】に属すると考えられる。

最後に、【社会】(C・1～C・5)について概観しよう。【社会】(正確には【社会環境】)は、すでに述べたように、人間が自然環境もしくは他の人間に働きかけるこ

とによって作り出したものである。その【実体】の下位概念を列挙すれば、【組織】・【記号】・【道具】・【作品】（ここで言う【作品】は広義のもので、芸術的な作品のみならず、衣食住に関するもの等を含む）の四概念が考えられる。それぞれの【部分・側面】に対応する命名単位をその【実体】とともに例示すれば、「会社—本社・支社、部・課・係」・「記号—能記（あらわし）・所記（あらわされ）」・「ネクタイ—大剣・小剣・小剣どめ」・「小説—題名・作者・主題（テーマ）・あらすじ（梗概）・登場人物」・「料理—素材・味・におい」などになると考えられる。また、【性質・状態】に対応する単語（「いい・わるい」「わかりやすい・わかりにくい」など）は、それだけで、あるいは、【存在】に対応する単語（「ある・ない」など）と同様に、【部分・側面】に対応する単語（「規模・表音性・素材・デザイン・難易度」など）と組み合わさって、組織・記号・道具・作品に対する評価の表現を構成することがある。

【社会の運動】に対応する命名単位の場合は、ある事態を、【人間の運動】に対応する命名単位を素材として表現するか否かといった問題と関係してくると考えられる。たとえば、ある事態を「わたしがお茶を入れました」と表現するか「お茶が入りました」と表現するかという問題である。前者に見える「入れる」は【人間（社会人）の運動】に対して与えられた単語であり、後者に見える「入る」は【社会（作品）の運動】に対して与えられた単語であると考えられる。

4. お わ り に

以上、命名の言語間対照のために有効と考えられる概念の体系の私案を提示し、その輪郭について述べた。今後は、実際に言語間対照を進めてゆきながら、今回提示した私案に修正を加えていきたいと思う。

また、第2章でふれた命名者の発想法については、今回提示した私案に修正をある程度加えた段階で、記述・考察を行いたいと思っている。

注

- 1) 玉村文郎（1984）48頁より引用。
- 2) 宮島達夫（1981）62頁では「その意味づけのしかた」とし、「〔表現法〕」「発想法」「とらえかた」「内部形式」などといっても、ほぼおなじことをさすだろ

う)と注記している。本稿では「発想法」を使用するが、今後、検討を加えたいと思う。

3) 岩淵悦太郎 (1970)「はしがき」参照。

参考文献

- 飯島 周 (訳) (1981), ヨゼフ・ヴァヘク (編) 『ヴィレーム・マテジウス 機能言語学 一般言語学に基づく現代英語の機能的分析』, 桐原書店。
- 岩淵悦太郎 (1970)『現代日本語』, 筑摩書房。
- 榎垣 実 (1961)『日英比較語学入門』, 大修館書店。
- 荻野綱男 (1989)「定義・命名」,『講座 日本語と日本語教育 第6巻 日本語の語彙・意味 (上)』, 明治書院。
- (1990)「意味分野」,『講座 日本語と日本語教育 第7巻 日本語の語彙・意味 (下)』, 明治書院。
- 柴田 武 (1977)「命名の言語学」,『月刊 言語』第6巻第1号, 大修館書店。
- (1982)「現代語の語彙体系」,『講座 日本語の語彙 第7巻 現代の語彙』, 明治書院。
- 鈴木孝夫 (1973)『ことばと文化』, 岩波書店。
- (編) (1976)『日本語講座第四巻 日本語の語彙と表現』, 大修館書店。
- 高橋太郎 (1996)「品詞の構成」,『国文学 解釈と鑑賞』第61巻1号, 至文堂。
- 田中章夫 (1978)『国語語彙論』, 明治書院。
- 玉村文郎 (1984, 1985)『語彙の研究と教育 (上) (下)』, 〈日本語教育指導参考書 12, 13〉, (国立国語研究所), 大蔵省印刷局。
- (編) (1988)「命名と造語」,『日本語百科大事典』, 大修館書店。
- (編) (1998)『新しい日本語研究を学ぶ人のために』, 世界思想社。
- 林 大 (1957)「語彙」,『講座 現代国語学 II ことばの体系』, 筑摩書房。
- (1964)『分類語彙表』, 〈国立国語研究所資料集6〉, 秀英出版。
- 林 四郎 (1982)「基本語彙——その構造観」,『講座 日本語の語彙 第1巻 語彙原論』, 明治書院。
- 三宅 鴻 (1976)「代名詞的表現」,『日本語講座第四巻 日本語の語彙と表現』, 大修館書店。
- 宮島達夫 (1989)『語彙論研究』, むぎ書房。
- (1981)『専門語の諸問題』, 秀英出版。
- 村木新次郎 (1987)「言語間の意味分野別語彙量の比較——日本語・中国語・ドイツ語の場合——」『計量国語学と日本語処理——理論と応用——』, 秋山書店。
- (1988)「言語の対照記述をめぐる」,『国文学 解釈と鑑賞』第3巻1号,

至文堂.

- (1990)「語彙研究のために」,『国文学 解釈と鑑賞』第55巻7号,至文堂.
——(1991)『日本語動詞の諸相』,ひつじ書房.
——(1996)「意味と品詞分類」,『国文学 解釈と鑑賞』第61巻1号,至文堂.
森岡健二(1976)「命名論」,『岩波講座 日本語1 日本語と国語学』岩波書店.
森岡健二/山口仲美(1985)『命名の言語学』,東海大学出版会.
山田 進(1990)「語の意味特徴の性格」,『文法と意味の間』,くろしお出版.
——(1996)「事物・概念・意味」,『言語学林1995—1996』,三省堂.

[付記]

本研究は、1997年度同志社女子大学在外研究（在外研究助成内規第二項による）の研究成果の一部である。